終わりのセラフ　二刀流の男の戦姫

ニャン吉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

基本は原作通りに進む予定。

祐也視点が多いです。

投稿のペースは遅いのでよろしくお願いします。

時々番外編もだそうかと思います。

少しオリジナルの設定が入っています。

例

・鬼呪術

目次

キャラ設定！ ―― 1
監視任務！ ―― 8
バカの吸血鬼殲滅部隊入り？ ―― 23
開かずの間 ―― 33
番外編　俺の仕事？ ―― 38
鬼に勝つ？ ―― 44
童貞関係ねぇぇぇぇぇぇぇぇ!!! ―― 49
あってはいけない２人 ―― 57
君月と俺の大きな差 ―― 62
番外編　俺とシノアの出会い ―― 68
祐也の出した試験！ ―― 75
なんでだよ！ ―― 81
番外編　私が幸（こう）になった日 ―― 87
新キャラ紹介。 ―― 93
授業とまさか ―― 96

キャラ設定！

主人公
柊祐也（ひいらぎゆうや）
旧姓三宮祐也
身長１８６ｃｍ
体重６８ｋｇ
三宮の天才と呼ばれ、鬼呪を扱う才能に恵まれ日本帝鬼軍で５本の指に入ると言われる実力を持っている。
吸血鬼からは（戦鬼）と呼ばれる為、軍でもグレンや義兄の暮人、深夜にからかわれてから（戦姫）と呼ばれ出した。（実はすごく気にしている。）
見た目はＳＡＯのガンゲイル版のキリトの髪の色を黄色くしてうちはイタチのように髪の毛を纏めている。眼がオッドアイで右目が赤色で左目が青色。鬼と契約した際に眼の色が変わった。
三宮三葉の二卵生の双子の兄で柊シノアの許婚。
シノアとは普段からイチャイチャしている。シノアに近づくやつには容赦しない。

基本は真面目でいい人なのだが、気に入ったやつはとことんいじめ倒す超ドＳ少年。
自分の部下は家族だ!といい非常に大切にしている為、部下も強くなる為に日々訓練を続けている。シノアも部下の１人だが部隊を組んだ時指揮系統はシノアに任せ、本人は仲間が死なないように戦闘に集中する。
本来は柊祐也率いる部隊が従者を中心として存在するが自らの意思でその部隊のメンバー（自分を含め）全員に新人育成の任務につけた為一時的に活動をしていない。
軍にいる時はシノアの事をそのままシノアと呼ぶが軍が関係ない時はシーちゃんと呼ぶ。
柊家に婿養子で入る。
日本帝鬼軍所属
少佐（後に中将）
武器
黒鬼シリーズ
朱雀刀（すざくとう）
祐也が右手に持つことが多い。見た目はＳＡＯのダークリパルサー
鬼としての見た目は食戟のソーマの小林竜胆の八重歯を少し大きくした感じ。
性格はとても友好的で、祐也のことを認めている為によく話しかけてくる。

本名はリリィ・ツェペシ。クルルツェペシの姉。
裕也には（リリ）と呼ばれている。
能力は発動型。
自然の五つの性質を操り攻撃することができる。
黒鬼シリーズ
青龍刀（せいりゅうとう）
祐也が左手に持つことが多い。
見た目は落第騎士の英雄譚のステラ・ヴァーミリオンのレーバテインの刃の模様以外の部分を青くしたものを少し細くしたような見た目。
鬼としての姿は機巧少女は傷つかないに出てくる禁忌人形の　焔のような見た目で片目を常に瞑っている。
性格は無口で静かなのを好む。口には出さないが祐也のことを認めている為多くの力を与えている。
本名はフウカ・バートリー。フェリドバードリーの姉
祐也に（フウ）と呼ばれている。
能力は憑依型。
身体能力を１０００倍に増加＋黒子のバスケでいう魔王の眼

ヒロイン
柊シノア（ひいらぎしのあ）
身長１５０ｃｍ
体重３（あははそれは言わないで下さいね。）（ｰ д ｰ）　ブルブル…
性格や武器見た目は基本的にアニメや漫画のものと同じだ。
しかし！祐也のことが大好きで離れようとしない。
軍にいる時は祐也と呼ぶが軍が関係ない時はゆうちゃんと呼ぶ。
アニメと違う点がもう２つあり、一つ目は料理がとても上手いことで二つ目は祐也の側近であること。立場は軍曹のままだが。
漫画版＆アニメ版主人公
百夜優一郎（ひゃくやゆういちろう）
性格と武器の全て、おいてアニメ版と同じ。
祐也にあって早々にバカ認定される。

主人公の姉
三宮葵

身長１６０ｃｍ
体重（無言の圧力＆抜刀状態での睨み）（((（;゜ ;ω;゜ ;))))　カタカタカタカタカタカタカタ
基本設定は原作と同じ。
祐也と仲が良い。
実は三葉とも仲良くしたいがどう接していいのかわからず良く祐也と暮人に相談している。
楓の事は溺愛しておりかなりのシスコンだが本人は
「会わなければ大丈夫！あったら大変！」
だそうです。
主人公のいもうと
三宮三葉
身長１５５ｃｍ
体重「い！わ！な！い！で！」
柊祐也の双子の妹基本的には原作通り
双子の兄に対して尊敬等の感情を持っている。
本来は柊祐也の部下だが柊祐也本人からの新人育成の任務によって一時的に一瀬グ

レンの元で柊シノア隊に入っている。
姉の三宮葵とは上手くいってないと思っており仲が良い祐也が羨ましい。
オリジナル登場人物
三宮楓（さんぐうかえで）
身長１４８ｃｍ
体重４（言わないで!）
三宮三葉と柊祐也の実の妹。日本帝鬼軍に入っているが鬼に対する耐性がとても弱いため、本人の意思で祐也の下で書類仕事につく。重度のブラコンである為シノアの許婚に関しては嫌がっていたが本来の仲の良さが甲を制してそのことをあんまり気にしなくなった。
葵の事は少し苦手意識を持っており葵の気配を察知すると祐也の後ろに隠れて見つからないようにする。
身長がとても低い事を気にしており言われると怒る?
見た目は魔法科高校の劣等生の司波美雪の髪を黄色にしてかなり身長を小さくした感じした感じ。
兄の下につくことにかんして本人曰く。
「お兄ちゃんは吸血鬼を沢山倒してくれるから私がお兄ちゃんの為にたくさんの書類を

倒す！そして沢山褒められたい！」

だそうです。

年齢は祐也の1つした。

監視任務！

「ゆうちゃん起きて。朝だよ。グレンに監視の任務を貰ったでしょ。起きて。」シノアの声を聞いて起きたオレはすぐにシノアのくちびるにキスをした。
「おはよ。シーちゃん。」
「おはよう！ゆうちゃん。朝ごはんが出来てるから制服に着替えて早く来てね。」
「了解！」
　そう答えた俺はすぐに着替えてリビングに向かった。
「シーちゃん。俺が少佐になった記念に買ったこの一軒家はどうかな？」
「流石にまだ慣れないよ。でもいつか子供と一緒に住みたいね。」
「そうだな。」
　シノアがテーブルに朝ご飯のサラダとフレンチトーストを2人分並べた。
「シーちゃん？指輪は嵌めたまま学校に行くかい？」
「当たり前だよ。ゆうちゃん。私達はこれでも夫婦だよ。」
「そうだね。それで今日からの監視対象は誰？」
「百夜優一郎っていうグレン中佐の秘蔵っ子だよ。何でも命令違反を繰り返して謹慎を

食らってるらしいよ。」
「そうなんだ。それじゃあ学校に行こうか。」そう言って俺はシノアに手を差し出す。するとシノアが
「はい！」と言って手を繋いだので学校へ歩いて向かったのだ。

ｓｉｄｅ優一郎
（納得いかねえ・・・・・・・
バケモノ倒したのに命令違反で謹慎ってどういうことだよ
だいたい軍人の俺が一般高校に行ってどうすんだっての
俺は吸血鬼に復讐する事しか興味ねぇんだよ。）
ｓｉｄｅ
「おーい百夜優一郎なにブツブツ言ってる？
いま授業中だぞ？」
あいつ今先生を無視したぞ。今後はあいつをバカと呼ぼう！決めた！
「おっお前その態度はなんだ!!?
転向してきたばっかで緊張してんのかな～って大目に見てきたのに・・・あんま態度悪いと停学にすんぞ!!」

「え!?停学にしてくれんの!!?マジで!?じゃあそれでお願いしま・・・」
バカだこいつ!絶対に俺の部隊に入れたくない!入れると大変なめにあいそうだ。
そう考えているとシノアがバカの背中をつついた。
「なんだよ
ってかお前　誰だよ?」
と馬鹿は言った。
シノアが紙を見せた。
私は柊シノア
あなたの隣に座っているのは私の許婚の柊祐也
軍からの監視官です。
「あ?
監視官?」
そしてシノアが紙にさらに書いていく。
もしあなたが協調性
がなさそうな
行動をしたら
軍に報告して

謹慎を延長する
ことになっています。
「ああ!!?」
バカが叫んだ。
「うるせえよ!バカ!」
そう言って俺はこのバカの頭を思いっきり叩いた。
「おい!柊!人を叩くな!」
「すいませんでした。隣がうるさかったのでつい。」
と俺が言うと隣のバカが
「くそが・・・」
それに反応する先生。
そしてそれを見て冷静にシノアが
「協調性」
と答えた。
バカは嫌そうな顔をしたので
「おいバカよ、協調性の欠片も無いバカの謹慎は」続きを言おうとするとシノアが
「この一般高校で友達が作れない限り解けない事になっています。頑張って友達を作っ

て下さいね。」と言うのだった。
　セリフを取られた。
　その後このバカは放課後までブツブツと言っていたけど無視をした！
……
放課後になったぜ。
「授業終わったー！」
「部活だりー」
「ねえ帰りアイスたべようよー」
「待ってて僕ちんもアイス」「大好きなんだよねー♪」
「同じことを考えたみたいだな。シーちゃん。」
「そうだね。ゆうちゃん。」
　そうあってシノアは俺のウデに抱きついてきた。
「何なんだよお前達は
　初対面なのになれなれしい」
「いやー。グレン中佐に言われたからねシーちゃん（＊゛ω゛＊）」
「はい！グレン中佐に言われてました。ゆうちゃん。（＊゛ω゛＊）」
「俺はお前の過去に興味はないけどな。例え吸血鬼に家族を皆殺しにされようとそれが

理由で他者と触れ合えなくなろうとな。」
「あら。ゆうちゃん実は少し気にしてるじゃない。もしかてこのバカさんを気に入ったの？」
「誰がバカだ！それにくだらねえこと言ってねえで早く俺を吸血鬼殲滅部隊に入れろって中佐に伝えろ、俺にはもう奴らを殺れるだけの力があるってな。」
「・・・と言い出すだろうからこれを渡せと中佐に頼まれた（頼まれました）。」
「「あれ。」」
「とりあえず渡そうゆうちゃん。」
「そうだな。シーちゃん。」
そう言って俺とシノアはバカに手紙を渡す。内容は全同じらしい。
仲間も友達も
恋人も作れない
ような童貞くんは
軍には要りませーん
くやしかったら
1人でも学校で友達
作って見ろっての

俺に紹介してみろ
っての
まあお前にゃ
無理だろうけどなー
プップー
それを読んだバカだは手紙を書くぐしゃぐしゃにして投げた。そして
「どいつもこいつもバカにしやがって・・・!!」
後ろから
「きゃあ!」と声を出して1人の少年が3人の男に飛ばされていた。
「や、やめてよぅ・・・」
「やめてだ?何だよそれ
それじゃ俺らがお前いじめてるみてぇじゃねえか
俺ら友達だからジュース買ってきてって頼んだだけだろ?
ナニヨその態度は?」
「うううう・・・」
「平和だねぇじゃ・・・俺帰るから」
「あれを見てあの感想か」

「あのおバカさんは当分友達作るのは難しそうですね。」
「まあいいけどね。例え来ても俺の部下に入る事は無いからね。」
「来たら困るよ。ゆうちゃん。」
　と話していると
「だいたい俺らの仲間になりたいって言ってきたのはお前だろうがよ与一？なら働けよ家畜見てーに」
　家畜に反応したのかバカが反応した。
「おい」
「ん？」
「そのへんにしとけよ」
「あ？なんだ」
「あれ情報と違って意外といい奴？」
「でも部下には要らないな。もう書類の整理も大変だしね。あんなのが増えたらどんだけ増えることやら。」
「それを言うなら書類で大変になるのは楓ちゃんですよ。みっちゃんもたまに手伝ってくれるけどね。」
「三葉は今、別の任務に出てるからな。俺的にはあのばかは書類はグレン中佐にいって

くれれば君月と一緒に鍛えてもいいかな。」
「やっぱりお気に入り?」
「いや。壊しがいがありそうだから。」
「ゆうちゃんの変なスイッチが入っちゃったよ。それとバカさん民間人に手を出したら謹慎延長ですって少佐命令です。」
「あああああああああああああ」
　殴られるバカ。
「結局殴らずじまいかよ。」
「延長させたかったんだね。ゆうちゃん。」
　そして10分後
「何で俺がパシリ・・・なんで俺が・・・」
「ご・・・ごめんね僕のせいで・・・」
「おいシノア!祐也!お前らも持てよ。」
「あはは面白いジョークですね。」
「そうだぞ!そんな物を持ったらシーちゃんと手を繋げなくなるだろうが。」
「いつも繋いでるからいいだろ!」
「よし!殺そうか!」

「こいつ！」
「ご・・・ごめんね・・・」
「おめーもさっきからヘコヘコ謝ってくんな！
　だいたいなんなんだよ。なんであいつらにいじめられてんだ？」
「い・・・いじめられてるわけじゃ・・・」
「はいはいいじめられてる奴はみんなそういうんだよ」
「ほんとでもいじめられてるわけじゃないんだ。」
「あ？」
「ぼ・・・僕が山中君にお願いごとがあって・・・・・・
　・・・だから仲間に入れて欲しいって頼んだんだ」
「山中って誰だっけ？」
「なるほど脳ミソ猿ですね。」
「シーちゃん。それは猿に失礼だよ。」
　それを聞いたバカは殴ろうとしてきたが
「・・・さっき百夜君を殴った人だよ」
「あああいつか・・・で何？頼みごと？」
「んとその・・・

僕・・・帝鬼軍の入隊試験落ちたんだけど・・・
どうしても入りたくて・・・
山中君・・・実はあの有名な吸血鬼殲滅部隊の・・・月鬼ノ組入が内定しているらしくて」
「与一!」
「どうしたの?えーと」
「俺は柊祐也だ。それとその山中ってのはそれ嘘だぞ。それよりなんで与一が月鬼ノ組に入りたがる?」
「どうしてもお姉ちゃんの敵が取りたいんだ・・・」
「・・・敵?」バカが久しぶりに口を挟んだ。
「うん
お姉ちゃん・・・僕を庇って吸血鬼に殺されたんだ・・・
僕・・・怖くて動けなくて・・・・・・」と話していたところに後ろから大きな音がした。
『緊急警報緊急警報
全生徒及び職員にお知らせします
隣接の生体実験施設から吸血鬼が1匹

逃げ出しました

全生徒及び職員は大至急敷地外に避難してください。』

「シーちゃん。大至急グレン中佐達を呼ぶように監視対象が既に走り出して吸血鬼に向かったのでオレは追う。与一のことは任せる！」

「了解です。」

そう言って俺はバカを追い、シノアは月鬼ノ組を呼びに移動した。

しばらくして

「やっと見つけたと思ったらあのバカが窓から吸血鬼と飛び降りて気やがった。」

「バカが久しぶりだな。チビ吸血鬼！」

「貴様は！戦鬼！」

「バカがよくやったよ。それとグレン中佐！遅くないですか？」

「お前も手を抜きすぎたなんで？鬼呪装備を出さないんだよ？」

「いやー。グレン中佐が来たし出すのも面倒だったので。でもまさか首チョンパするとは思わなかったよ。このバカには刺激が強いかな。」

「こいつなら大丈夫だろ。それにしてもなんだその姿は！こいつはともかくお前が抗吸血呪も掛かってない一般兵器で吸血鬼狩れるわきゃねえだろ。

だがまあ今回はガキの割によくやった

お前のおかげで犠牲が少なくてすんだ
学校の友達を守ったな」
「・・・はっ
友達？
興味ねえよ」
ｓｉｄｅバカ（百夜優一郎）
（あれが月鬼ノ組・・・なんでシノアと祐也がいるんだよ。）
「ってか俺の実力を見たろ？俺は吸血鬼とやりあえる
いい加減俺を月鬼ノ組に入れろよ。」
ｓｉｄｅ
「やだね。
俺はチームワークできない奴嫌いだし。」
「俺も賛成。こいつが来ると書類で任務に出れなくなりそう。それと中佐が「１番チームワークできないですけ　どね」シノア、それは俺のセリフ。」
「あ？何か言ったか？」
「いいえ。怖いよ祐也！グレン中佐に怖いことされる。」
「まあとにかくこのふたりに伝言させた通りだ

お前はこの学校でも友達作れなきゃ・・・」
「友達友達うっせえんだよ!!
んなもん吸血鬼殺すのにゃいらねで」
「グレン中佐。」
「どうした?祐也少佐?」
「こいつは1度ころ「う、う、うわあよかった!!」おい、与一。」
「百夜君無事だったんだ!!」
「あ?」
「死んだかと思ったあああああああ!!!」
「はあああ!!?ちょっ・・・おまえ何なんだよ!?
鼻水汚え・・・
って痛い痛い痛い痛い!!」
そういいながらバカは気絶した。
「何あれ?」
「一応友達みたいですよ。」
「名前を与一と言う。苗字は聞いてないや。あのバカが虐められてるところを助けたんだよ。意外と仲間思いかもしれないな。」

「これで約束守らなきゃいけなくなりましたね中佐。」
「書類をこっちに回さないで下さい。」
「えー嘘だろぉ?」

バカの吸血鬼殲滅部隊入り？

「いやーそれにしてもあのバカが気絶してから2時間後に呼び出しをくらうとわね。シーちゃん。」
「ホントにもうちょっと家でゆっくりしたかったね。ゆうちゃん。」
「とりあえず、病院に行くかな。」
　そう言って手を出しその手を繋ぐシノア
「行きましょう！ゆうちゃん。」
　・・・15分後病院のバカの個室についた。
「もう起きたのかよ。まだ寝てろよ。バカ！」
「ホントに空気をよんでください。バカさん」
「何だよバカって！」
「そんなことを言っていていいのか？百夜優一郎！」
「何だよ！いきなりフルネームで呼びやがって。」
「私たちがあなたの欲しいものに近づくものを持ってきました。」
「何だよ！それは？」

「新しい制服を渡しておきます。」
「友達がちゃんと作れたみたいだからな。
今日付けでバカを吸血鬼殲滅部隊に配属とする。
だから俺達はな。」
「あなたの大嫌いな仲間！ですね。」
「仕方が無いけど。」
「「ようこそ月鬼軍ノ組へ。」」
「与一もだそっていうかもう制服渡してあるけどサイズは大丈夫だったか？」
「うん。祐也君。ピッタリだったよ。」
「そうか。バカはサイズが小さくても返還は無しだからな。オレの仕事がバカのせいで増えるのはゴメンだ。与一はしっかりとがんばれよ！」
「うん！」
「という訳で」
「これからよろしくお願いしますね。」
「それじゃあ帰るか。また明日な。与一。バカ！」
「じゃあね祐也君！シノアさん。」
・・・家に帰るついでに食材を買って帰ると家に楓がいた。

「楓！来たか！」
「ようこそ！楓ちゃん。」
「お仕事お疲れ様！ゆうお兄ちゃん！シノお姉ちゃん」
そう言うと楓が俺とシノアに突っ込んできた。
「今日は三葉と一緒じゃないんだな。」
「お姉ちゃんはまだ任務で帰っていないよ。それより、ご飯を作ったから食べよ。」
こうして3人で他愛もない会話をしながら夕食を食べて次の日に備えたのだ。
……

翌日
「あ・・・あの・・・
ひゃ百夜優一郎君！
あの時は吸血鬼から助けてくれて・・・ありがとうございました・・・
あなたが好きです!!私の気持ち・・・読んで下さい!!」
そう言ってバカの前に女の子が手紙を思いっ切り突き出した。
「いや・・・
俺・・・
全然ンなことしてる暇ねぇんだけど・・・」

「やーおもしれ。バカにモテ期だよ。シーちゃん！笑っちゃうよな！」
「ホントだね。笑っちゃうね！それにしてもバカさんは学校を救った英雄さんモテモテですねー（笑）」
「やめろよ！」
「「今度はあの子を泣かせるんだ（泣かせるんですね）。」」
「今度はって何だよ！
　俺ンなことしてねぇだろが。」
「まあ童貞だからな。」
「祐也てめえ！」
「でも童貞は悪ですよおバカさん。」
「だって日本帝鬼軍はカップル成立を推奨しまくってるからな。シーちゃん（＊、ω、＊）」
「そうだね。ゆうちゃん（＊、ω、＊）」
「俺の前でいちゃつくな！」
「お前に言うまでもないが「俺を無視するな！」日本は1度滅んだようなもんだからな。人口が少なすぎる。だから我ら日本帝鬼軍は残った人間を増殖させて世界の覇権を狙っている。」

「さあ産むのです
増えるのです！」
我ら日本帝鬼軍のために」
「「ビバ！不純異性交遊！」」
「ってことは祐也バカ童貞じゃねえのかよ！」
「何をいまさら（。—。）」
「仕方が無いよ。ゆうちゃん（*、ω、*）なんせ相手はおバカさんだからね。」
「そうだったよ。シーちゃん（*、ω、*）いつか、いや今すぐにでも愛の結晶を作るか？」
「いいですねえ。最近はやって無いからやりますか。ゆうちゃん（*、ω、*）」
「わかったからもうイチャイチャするな。・・・つかさ、1つ聞いていいか？」
「なんだ？」
「俺こないだの吸血鬼との戦いで実力を認められて吸血鬼殲滅部隊に配属されたんだよな？なのになんでまだ高校通ってんだ？」
「俺から1つ！グレン中佐はお前の剣の技量だけは二年前からみとめている。半人前もしてはな。それと配属された理由はお前に友人が出来たからだ。まだ文句があるなら中佐に言ってくれ。」

「グレンの馬鹿！全然軍の執務室にいねぇだろうが!!どうやって文句言うんだよ！」
「中佐のことを私達に怒鳴られましても・・・」
「それに訓練は既に始まっている。」
「ちなみに訓練っていうのはあなたが心の底から欲しがっているものを手に入れるための物だよ。」
「例えば」
　そう言って俺は右手に指輪をシノアも右手に鍵のような形をしたものを取り出す。
「これでしょう。」
　そう言ったのを合図に顕現させる。
　それを見てバカが
「そ・・・・・・そりゃあ・・・・・・・」
「まずはわたしが契約している鬼『四鎌童子』と」
「俺の契約している鬼の『朱雀刀』だ。もう1本あるけどまだ見せなくてもいいや。」
「一応私達も吸血鬼殲滅部隊の一員ですからねぇ」
「これが・・・
　吸血鬼を呪い殺せる・・・
　鬼呪装備か・・・・・・

これがあれば俺も1人でも吸血鬼を殺せる」
「いえゆうちゃんは別として1人じゃ無理です。」
「そろそろ協調性を覚えようぜ」
「おい！シノア！祐也！
それよこせよ」
「何を言うかと思えばシーちゃんも呆れて声を出せなくなってるぞ。」
「ここまでおバカさんだとは思いませんでした。」
「うるせえよ！俺はそれを持って吸血鬼どもに復讐に行く！」
「無理だな。」
「そうですよ。他人が契約した鬼の武器は使えません。」
「だったらその武器の実力を見せてみろよ!!」
「もぉ～
一般装備で鬼呪装備と戦うなんて無理ですよ?」
そう言ってシノアは鎌を前に出してバカの攻撃を防いだ。
バカは何か驚いているようだ。
「シーちゃんこのバカを」
俺は手をシノアの前に出して

「ここは俺に任せてくれないかな？」
「わかりました。」
「ありがと（*´ ω｀*）・・・それとバカは鬼呪装備の力が見たいと言ったな。」
「そうだが！」
「なら見せてやるよ。死んだらごめんな。『リリ』死なない程度に殺れ！一撃で良いぞ。」
（わかったよ！祐也！雷で行くよ！）
「何だよ！その剣は」
　そう言った瞬間に雷に飛ばされてバカはフェンスにぶつかっていた。
「は、ははっ！
　まじですげえなそれ・・・
　それさえありゃ吸血鬼なんて敵じゃねぇんじゃねぇか？」
「バカはやっぱりバカのままだな。戦場に連れていけねえは。」
「そうですね。戦場では向こうも武装しますからね。」
「この前やった奴とは別格だよ。特に貴族の連中は。」
「武装？マジで？」
「だから部隊で動くために協調性を学びましょうと中佐は仰って」
　シノアが言い切る前に屋上の扉が勢いよく開く。

「た、た、助けて優君！祐也君！」
「なんだ！与一
　まーたおまえいじめられてるのか？」
「なんかめんどくさくなりそうだから離れようシーちゃん（＊゛ω、＊）」
「はい。ゆうちゃん（＊゛ω、＊）」
　そして２人で少し離れようとすると２人の耳に『開かずの間』と言う言葉が入ってくる。
「お前らは開かずの間に入った友達を助けて貰おうってことだな！」
「はい。」山中はおとなしく肯定する。
「無理だな。」
「軍管理下の一級立ち入り禁止区域を侵したんでよね？」
「そっそれは」
「言い訳はいらない。
　どうせ度胸試しとかそんなところだな。」
「ですが
　あそこに入ったものにはとても厳しい罰が与えられます。」
「そ・・・

それじゃあ祐二は・・・」
「軍に捕まって死刑になってるかもな。」
「吸血鬼殲滅部隊のエリートのあんたらなら助けることが」
「２度も言わせるなよ。無理だから諦めろ。」
そう言って俺とシノアが屋上から降りて行った。

開かずの間

俺とシノアはバカと与一を連れて歩いていると。
「シノア!祐也!
一体何の話だよ。『開かずの間』って・・・?」
と突然バカが聞いてきた。
「ふふ・・・知りませんか?
学校の七不思議ですよ。」
「そのいくつかある中の一つで絶対に開けてはいけないと言われると『開かずの間』」
「なーにが七不思議だよ!
軍が管理してる立ち入り禁止区域なんだろ?」
「馬鹿にしては勘が鋭いな正解だ。」
「そこに祐二君が入って・・・出てこれなくなった?」
「でしょうね」
「あそこは吸血鬼殲滅部隊の隊員を育成する為の場所だからな。」

「訓練を受けていない人か入ると鬼に取り付かれる可能性があります。」
「はっ？
　鬼ってまさかそれ・・・」
「言っただろ。」
「「もう殲滅部隊に入る訓練は始まってるって」」
「そしてそろそろ・・・」
「次のステップへ行っても良さそうだな。」
「ゆうちゃんそれは私のセリフ!?（。、H。）？プンスカ！まぁいいです。バカさんと与一さんは付いてきてください。」
　それからしばらく歩き開かずの間を開けて４人は中に入っていった。
　そして歩きながらバカが聞いてきた！
「地下神殿？
　なんで学校の地下に神殿があるんだよ？」
「神殿っていうのはまぁ呼び名だけですけどね。」
「俺が８才の時に黒鬼装備に挑戦するために向かう時に「神殿みたいでかっこいい！」って言ったらそれがここの呼び名になったんだよ。」
「そんなのはどうだっていい！」

「かつて渋谷の地下には「だから無視するな！」川の増水を防ぐための巨大な空洞があったんだ。」
「というか
　学校全体が殲滅部隊の訓練場になっています。」
「地下に鬼を飼い
　鬼の邪気にあてられても暴走しなかった人間を
　部隊に入れていく・・・つまりここは」
「「壮大な人体実験のための学校とういわけだ。（ですね。）」」
「こんな狂った時代に
　平和な学校が存在すると思ったんですね？」
「事実俺もこの学校から何人も。俺の部隊に取り込んでる。俺の部下としてね。そしてある程度訓練してオレに従順になった者をまたこの学校任務に通わせて良さそうな人をまた部下に取り入れる。その為の場だよ。ここは。」
　話しているうちにさらに奥の扉の前にたどり着いた。
　立ち入り禁止区域
　旧渋谷地下神殿入口
　と書かれている。

「ここから先は私たち殲滅部隊に呼ばれた人材か、」
「鬼に呼ばれた奴しか入れない。」
「じゃあ祐二君は・・・」
「私たちは呼んでませんねぇ」
「今は鬼に心を喰われているかもな。」
「心を鬼に食われたらどうなるの？」
「吸血鬼より質の悪い・・・」
「理性の無い人食いの鬼になる！
　だから念入りに修練する必要がある。」
「特に心の修練がです。」
「今回はその鬼呪装備の怖さを知ってもらおうと思ったんだが」
「んな馬鹿丁寧な説明はいらねぇんだよ。
　要は鬼に負けなきゃいいんだろ？
　俺には復讐の為に力がいるんだよ。
　鬼だろうが悪魔だろうが力が手に入るなら何でもいい。」
「なら死んでこいよ。」
「ちょっと。ゆうちゃん！ここは止めないと。」

バカは勝手に扉を開けて中に入っていった。すると中は様々な武器が飛び散り奥の魔法陣のようなところの上に鬼呪装備に心を食われた人が立っていた。

「あれが・・・」

「鬼だな。」

番外編　俺の仕事?

とある日俺はバカ＝百夜優一郎に大量の荷物を運ばせていた。
「おい！祐也！シノア！なんで俺がお前達の言う事を聞かないといけないんだよ？何様だよ。」
「それはですね。あなたの上司様ですよ。おバカさん」
「そうだぞ！バカ！」
「偉そうにするからには相当お前らは偉いんだろうな！」
「そうだぞ！俺は相当偉いぞ！それと上司に対する口のききかたがなっていない！」
そう言って俺は思いっ切りバカの頭を殴った。
「では月鬼ノ組としての自己紹介をしましょう。」
「まずは俺だな。
日本帝鬼軍月鬼ノ組少佐！柊祐也だ！元の名を三宮祐也と言う。」
「それで私ですね。
日本帝鬼軍月鬼ノ組軍曹でゆうちゃんの秘書的な役割をしています、柊シノアです。ご存知の通りゆうちゃんの許婚でもあります。」

「月鬼ノ組でこれから組む新人育成の為の隊では指揮系統が得意なシーちゃんに指揮を任せている。俺はわざわざお前達のような4分の一人前の新人を死なない程度に育成しながら吸血鬼から守る為にシーちゃんと妹の三葉と共に下の部隊に降りてやったんだ。感謝しろよ。」
「そうですね。おバカさん。ゆうちゃんは元々中佐の部隊にいましたからね。感謝してくださいね。」
「シーちゃん!それはだいぶ前の話!この前までは俺が隊長のチームにいただろ!」
「そうでした。」
「そうかよ!グレンのチームにいたってことは祐也は強いんだよな!」
「まずは上司に対する口の効き方を覚えろよ。それと少なくとも」
「ここからは私が。ゆうちゃんは日本帝鬼軍で5本の指に入る実力を持っています。中佐のもつこの部隊の中ではトップの実力を持っています。指揮系統が苦手なのでグレン中佐が代表ですがね。」
「そうか!・・・祐也!俺と勝負しろ!」
「アホか!やっぱりバカなのか?」
「そうですね。バカですね。」
「バカバカ言ってねぇでさっさと勝負しろ!負けるのが怖いのかよ!祐也!」

「まずはさありえないことを言ってることに気付こうよ。俺がバカを殺さないように戦うのにどれだけ手加減しないとならないと思ってるの?」
「手加減は無用だ!」
「おバカさん!死にますよ。間違いなく。」
「オレはそんなに弱くねえよ。」
「弱いよ。バカは弱すぎる。」
「なんだと!」
「守るものも守ってくれるものもない奴に負ける理由が無いよ。それじゃあ鬼呪装備は無理だな。」
「何言ってんだよ!鬼くらい余裕だ「負けるよ。」なんだと（、o、）」
「間違いなく負けますね。1分も負けるまで掛からないでしょう。」
「5秒あれば死んでるよ。シーちゃん。でも殺さない様に気をつけないと。」
「そうでしたね。」
　と俺とシノアがバカのことを話していると
「余所見してんじゃねーよ!」と斬りかかってきた。
「仕方が無いけど。おいで『青龍刀』」
　左手に青龍刀を出してバカの剣を受け止めて、バカが落ちる瞬間にバカの腹に思いっ

切りまわし蹴りを入れた。
　それを食らったバカはさっき開けておいた窓から飛んでいった。
「流石にこの程度では死なないでしょうね。ゆうちゃん（*゜ω゜*）」
「当たり前だろ。手加減したんだからね（*゜ω゜*）これで死んだら吸血鬼の敵にもならないよ。」
　そう言って俺は近くの椅子に座るとシノアも俺の隣に座って
「あのおバカさんもそろそろ協調性を覚えて欲しいですね。出ないと私達が危険になりますからね。」
「大丈夫だよ。シーちゃんも三葉も新人も俺が守るから。でもその前にバカが通っている学校の秘密を知って日本帝鬼軍に絶望するかもね。それに部下もだいぶ増えてきて書類とかも大変でしょ。シーちゃん。俺は基本的に任務で書類仕事をシーちゃんと楓に任せっきりになってるからね。必要ならもう一人置こうか？」
「そうですね。そろそろ私も新人育成の任務がゆうちゃんと一緒に始まりますからね。2人ほど増やして欲しいですね。」
「わかった。ならさ、俺がだいぶ前に保護した子供が2人いて、2人とも来年中学を卒業するから書類整理を楓を班長にして任せてみるかな。日本帝鬼軍の人は信用出来ない人を派遣することがあるからね。」

「私もですか?」
「シーちゃんは別だよ。いつからシーちゃんが俺の隣にいるのさ。楓より信用してるよ。」
「今のを楓ちゃんに言ったら泣きますよ。楓ちゃん!」
「だな。言わないでくれよ。」
「わかりました。それにしてもあのおバカさんをあの教室にいれてグレン中佐は何がしたいのでしょうか?」
「うまく行けば黒鬼シリーズに君月と与一と一緒に挑戦させるとか?」
「なんで? 君月君と与一さんなんですか?。」
「1度君月にこっそり試したんだよね。そしたら大丈夫だったから俺だったら間違いなく挑戦させるよ。与一はあれは安定度はあるけど欲が圧倒的に足りない。だからそこさえどうにかなれば才能はいいものがあるよ。」
「それでは私たちはそれまでに与一さんを鍛えましょう!」
「だな!」
「「だな!」じゃねえよ!与一じゃなくて俺を鍛えろよ!俺に早く吸血鬼を殺せる力をよこせ!」
「バカは俺の管轄じゃないから無理!絶対に俺の所に来るなよ!これからグレン中佐に

与一の交渉をするので準備が忙しいんだよ！」

「さっさとおれを、…ガホッ」

うるさいのでまた腹を思いっきり蹴り窓から落としました。

こうして俺の日常はバカをボコボコにして過ぎていきました。

鬼に勝つ?

目の前任務に鬼に取り憑かれて暴走している奴がいる。
「バカ! 見るだけにしとけよ。お前には無理だ。」
「そうですよ。手を出さないでください。」
「あの斧
まだ契約できてねぇんだろ?
なら俺が頂く。」
「は?」
さっきのバカの発言を聞いて俺とシノアはフリーズした。
「ってあああああ
ちょっともぉ〜」
とシノアが言ったので俺が
「シノア! 与一を連れてとりあえず月鬼ノ組を呼んできた紅かな?」
「わかりました。呼んできますから今度デートに行きましょうね（*、ω、*）」
「いいよ。シーちゃん（*、ω、*）楽しみにしててよ。」

「はい！では与一さん！ここは危険なので行きますよ。」
「待ってよシノアちゃん！」
「与一！」
「何かな？祐也君？」
「シーちゃんに手を出したら斬るからね（＾ω＾）ニコッ」
「はっ・・・はい！」と少し怯えてシノアに与一はついて行った。
視線をさっきの鬼の方に向けるとバカが飛びかかり斬ろうとしていた。
「その斧を・・・
よっこせぇぇぇぇ!!」
と言って斬り掛かるが斧で受け止められる。
「へへっ
すげぇな
おい・・・
だが・・・
祐也の剣よりは弱ぇ!!」
そう言ってバカは素手で鬼呪装備に触れようとした。
ホントにバカの相手は疲れるよ。

そう思いながら俺はバカを蹴っ飛ばした。
「ホントに協調性の欠片もねえな。
鬼呪装備に素手で触るなよ。鬼に侵食されてお前を殺さないといけなくなるからよ。」
「俺は鬼には負けねえよ。」
「そうだな。もしかしたら勝てるかもしれない。でも勝てない。お前には守るべき人も守ってくれる人もいない。
その孤独がある限りお前は勝てないよ。思い出せよ。グレンの言った。『友達を作れ』と言う言葉を」
「ざっけんな!俺は守られるためにここに来たわけじゃねぇよ!要は俺が鬼に勝てばいいんだろ!今すぐに証明してやるよ。」
そう言うとバカは持っていた刀を落として突然走り出し、斧を素手で掴み取り突然倒れた。
ｓｉｄｅバカ
俺はミカ達にあっているのか?
あいつらは何を言っている?
ミカたちはあんなことは言わねえよ!

俺の家族に化けて出てくるんじゃねえよ！

ｓｉｄｅ

バカが目を覚ました。

「目を覚ましたか。」

「あれ？俺は今は何をしていたんだ？」

「・・・嘘でしょう？

まさか自力で戻ったんですか？」

「ん？

何が戻ったって？」

そこから少しだけ鬼呪装備を手に入れる方法をバカに説明をした。

「でも俺は鬼に勝った。

そうだよな？」

「えーと」

「シーちゃん（´Д`）ハァ…

誤魔化さなくてもいいよ。（´・ω・）ノ（´Д`＊）なでなで

バカ！確かに勝ったけど1番弱いレベルの奴だからな。でも一応上には伝えといてやるよ。」

「なので明日からでもこの吸血鬼殲滅部隊の訓練校に通うことになるでしょう。」
「よっしゃあああああああ!!!!!!!!!!」
「はは・・・
　な～んて勝手に決めたら私怒られるかな?」
「シーちゃん（、・ω・）ノ（、д、＊）なでなで俺も怒られてやるよ。」
「ありがとう!ゆうちゃん!（、。・д人）シクシク…」
「何か決まったら俺の部下がグレンの部下のどっちかがお前に伝えに行くから覚えとけよ。早ければ今日中だ!早く部屋に戻れ!」
「おっ!おう!!!」
　そう言ってバカは部屋に走って行った。
「報告に行くかな。シーちゃん（、д、）ハァ…」
「はい行きましょう（、д、）ハァ…」
　その日の夜!俺の部下の1人がバカに伝えに行ったのだった。

童貞関係ねぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!

グレンの執務室に呼ばれて向かう俺とシノア

「祐也！明日の授業！お前も来いよ。」

「なんでだよ？」

「何でもだよ！」

「だからなんでだよ！」

「大体で察しろよ！喧嘩が起きるだろ！あの二人が揃ったら！だから俺とお前の２人で鬼の制裁をくだす！」

「ほぉ！それはいいね！どうする？バカが問題でも起こしたらパスでもするか？してきたらパスし返すけど。」

「いいね。祐也！お前も悪いな。」

「イヤイヤゾノ・ω・ｉ）グレン程じゃないよ（笑）」

「まぁそういう訳だ！明日は頼むぞ！」

「任せとけ！」

「ゆうちゃんもグレン中佐も程々にお願いしますよ。」

「「気分だな。」」
　こうして2人の制裁の方法は決まったのだった。
　そして翌日
「おっと。あんな所にいるのは君月君と優一郎さんでは無いですか？」
「ほんとだ何か始まりそうだな。・・・
　あっ！君月がわざとぶつかった。」
「とめる？ゆうちゃん？」
「あんなに面白そうなことを止めるのはもったいないだろ？」
「そうでした（＊゜ω゜＊）」
「早く待ち合わせ場所に行こうぜ。」
　と言って俺はシノアに手を出す。その手をシノアが掴んで
「はい！行きましょう。ゆうちゃん（＾ω＾）ニコッ」
　と言い向かうのであった。
　5分後集合場所に着いた俺とシノアは与一とバカを見つけた。
「あら？」
「その顔は「また謹慎にしてください」って俺に報告か？」
「喧嘩してませーん

僕してませーん」
「そうかい。つまらねえな。」
「それより今日からですね。」
「はい！そうなんです！今日から僕ら吸血鬼殲滅部隊！
月鬼ノ組に入るための研修教室に・・・!!!!」
と珍しく与一が大声を出した。
「与一。」
「何？祐也君？」
「うるさいよ。少し静かにしてくれるかな？（＾ω＾）ニコッ」
「研修なんていらねぇんだよ。
とっとと実践に突入しろっての」
「わかりました！
じゃあ百夜さんは研修を受けないので武器と装備無しで実践へどうぞ」
「ついでに下着もなしだな。（*´艸`*）」
「おい！祐也！それは俺に裸で出ろって言うのか？」
「その言い方はなんだよ？俺はお前の上司だぞ！上司！」
「だからなんだよ！」

「よし（＊、ω、＊）1発殴ろうか。そして違いを教えてやる！」
「ゆうちゃん落ち着いて。それと行きますよ。研修教室に案内します。」
そう言って俺とシノアはバカと与一を案内した。
その間後ろの2人は話していたようだ。
「月鬼ノ組の研修教室っていったら
軍の中でもズバ抜けた才能がある人だけなんだよ。
おまけに僕と優くんは途中転入組だし・・・
もし嫌われたり・・・
虐められたりしたら・・・」
「おまえここに友達でも作りに来たのか？」
「いやそれは・・・」
「余計な心配すんな」
「でも・・・」
「あ～うるさぇ
ンなことになったら俺が守ってやっから黙れ」
こいつ少し成長したのか？
「それって優くんが僕を」

「ばーか当たり前だろ？
とりあえず全員にぶん殴って俺の実力を思い知らせる！」
これを聞いて俺は無意識に回し蹴りをバカの側頭部に入れた。
「何すんだよ！祐也！」
「せっかく成長したと思ったのに・・・（ ´д`）ハァ…」
「てめえ！そんなにわかりやすいため息を吐くな！
さあ！行くぞ！与一！
さっさと研修を終わらせて吸血鬼を殺すんだ!!」
これを聞いて呆れながら俺とシノアは教室に向かった。
教室に着いたオレは扉を開けて
「失礼するぞ！グレン中佐。」
中に入ると
「戦姫様だ！」
「ほんとだ戦姫様だ！」
と何人も言ってくるがその後に決まって付け足されるのが
「許婚とよくわからないのが2人もいるぞ？」
少しざわついた後

グレンが
「お前ら聞け
今日は珍しく担任である俺がここに出向いてやったのは今日1日戦姫こと柊祐也が1日先生をやるのと2人の転入生を紹介するからだ!」
「ちなみに言っておきますが
担任は普通毎日教室に来るものですよ。」
「シーちゃんのいう通りですよ。」
「お前らは黙ってろ。
あーなんだ。とりあえずこいつらだ。
百夜優一郎と早乙女与一
一言で言うとアホと弱虫だな。
今日からこの教室の一員になる事になった。」
「誰がアホだよ!!?」
「よ・・・弱虫・・・弱虫・・・」
「事実だろ?」
「いいから自己紹介しろ。」
「少しいいかい。」

「どうした？祐也？」
「ここのメンバーを何人か俺の部隊の方に俺なりの試験をやった後に貰ってもいいか？」
「勝手にしろ。そういうことだ。もしかしたら俺のところじゃ無くて祐也の方に行く可能性もあるからな。それじゃあ２人は自己紹介しろ。」
「いらねぇよ。
俺ら友達作りに来たんじゃねえんだ。」
「えええ
ちょ
優くん
あの
優くん？」
「ここにいる奴らにも言っとくが俺はお前らと馴れ合うつもりはねえから!!
だいたいこの研修教室は・・・あんたちの腰に刺さってるみたいな鬼呪装備の契約ができる人材か見極めるとこなんだろ？
んじゃ今から宣言しとく
ここにいるクズどもが今まで何勉強してたかは知らねぇがお前らのやってたことは

無駄だ！一番いい武器は俺が貰うことになった以上!!!!!!!!!!」

それを聞いた俺とグレンは

「「以上じゃねぇぇ」」

そう言ってグレンがバカを俺の方に蹴り飛ばしてきたので俺もグレンに返すように蹴り返す。

「お前は普通科で何を学んで来たんだ!!!!協調性ねぇ奴はやめさすっっったろ!!このアホが!!クズ!!童貞!!」

「童貞関係ねぇえええええええ!!!!」

あってはいけない２人

バカが俺とグレンに殴りかかってきた。
(あいつ正気か?あの一瀬中佐と戦姫に殴りかかってんぞ。
一瀬中佐ってたった１部隊で吸血鬼から新宿を奪還した英雄で
祐也少佐だってたった１人で２人の貴族の吸血鬼を殺した日本帝鬼軍のトップレベルだってきいてるのに)
とこの光景を見ていた教室にいた生徒達は思っていた。
この沈黙の中グレンが
「ああもういい!座れバカが!
あー席は・・・
あそこな」
そこはなんと君月の前の席だった。
席を決められたバカは席に向かい目の前に着くと君月が足を前に向けていた。
「なんだよおまえ・・・
ここ俺の席になったから足向けんなよ

おいお前聞いてんのか？」
「ンが
んだようっせーな・・・
もう昼か？」
この２人が教室で出会ってしまった。
「グレン？」
「なんだ？祐也」
「あの２人を被害が出る前に気絶させた方がいいよ。」
「わかった。よしやれ。」
と気絶させる許可が出た時には２人の喧嘩が怒っていた。
「こいつらなんなの？
たしか君月も先月まで普通科でシノアと祐也に監視させて友達作りやらせたはずだよな？」
「効果は？」
「俺に怯えてなのか、君月は友達を作ったはずだが。」
「今はご覧の通りです。」
「祐也。脅さないで友達を作れるようにしろよ。

それと監視はしてたんだな？」
「「もちろん！」」
「今朝も君月君は吸血鬼を殺したと噂の百夜優一郎君の実力をはかるために襲ってました。」
「で、お前らは仲裁に入ったのか？」
「「面白そうだったから見てた。（見てました）」」
「ちゃんと仕事しろよ。それと祐也！今度の獲物はあの２人だ！やるぞ」
「任せろ。遅れるなよ。」
そう言って俺とグレンは喧嘩中の２人に向かい
「「あーやかましい！」」
そう言って２人まとめて蹴ったのだ。
「与一！バカ２人は絶対に起こすなよ。進まなくなるから。」

ミニ番外編　鬼呪術の授業
そう言って俺の鬼呪術に関する授業が始まった。
授業をしていくと与一の才能に俺は何度も驚く事になった。
これだけの才能があれば後は覚悟だけだな。と思っていると与一から質問が入った。

「祐也君？」
「どうした？与一！」
「この回復の鬼呪術ってどの位回復の出来るの？」
「俺の場合死ななければ完治するぞ。死んだらダメだけどな。」
「せんせーい（＊゛ω゛＊）」
「はい！シノア！」
「いつも通りシーちゃんって呼んでよ（。ー゛ω゛ー）」
「今は授業中だ。自重しなさい。」
「はーい。」
「祐也君？」
「どうした？与一！」
「この倒れてる２人にこの鬼呪を使ってもいいですか？」
「ダメだ！」
「なんで？」
「俺の授業を潰す気か？」
　それを聞いた教室のほかのメンバーが全員
（確かに！）

そう思ったのだッだった。

君月と俺の大きな差

バカを蹴ってから少しして放課後になった。
俺はグレンに呼ばれたので執務室に向かっていた。
なかに入るとグレンに聞かれた。
「あの教室にお前の目に適う奴はいたか？」
「それを俺に聞いてどうする？」
「来週試す。」
「そうかい。」
「で、どうだ？」
「与一。俺の部隊に欲しいくらいだ。」
「お前の今、活動停止している班か？確かシノアと三葉そしてお前が昔、死体で見つけて鬼呪術で復活させた女２人か？」
「そうだけど。」
「なぜ与一だ？」
「鬼に対する安定度が桁違いだ。後は俺が鍛えたら鬼もしっかりと使えるようになるだ

ろう。バカは来るとうるさいからな、いろんな意味で。」
「そんなことを言ったら与一もだぞ。」
「なんで？」
「お前の班の・・・は与一の・・・・・・だからだ。」
「マジで。でもあっちは記憶がねえよ。」
「与一が覚えてる。」
「マジか。俺の班にはバカの・・・の時に・・・した奴もいるからな。名前がわからなかったから・・・って名前にしたけど。」

２人のこの会話を君月は偶然聞いてしまったのだ。
だが君月は気にぜずに
「失礼します。
一瀬中佐！・・・と祐也少佐ちょっといいですか？」
「だめだね勝手に入ってくんな。」
「しっかりと許可を貰ってから部屋に入れよ。入るならよ。」
「それより、１週間後の鬼呪装備適性試験のことですが
当然俺が最上位『黒鬼』のシリーズに挑戦させてもらえるんですよね？」

「だから勝手に入ってくんなって。」
「全科目の成績は俺がトップのハズです。
　それともあの吸血鬼を倒したとかいうハッタリ馬鹿を選ぶつもりじゃありませんよね？」
「君月！そんなに焦っても意味無いよ。これは同い年の鬼呪装備を持つ人としての忠告。それとなんで？そんなに焦って力をほしがる？」
「祐也少佐。なぜそんな質問をする？どうせ軍は俺の素性を知ってるんだろ？」
「知ってるさ。」
「ああ知ってる。もちろん知ってて利用してる。」
「あれだろ？君月の妹は大人だけがかかるはずだったウイルスに子供なのにかかった。だから治療の為に金がいる。そうだろ？」
「吸血鬼殲滅部隊はエリート集団だ。
　所属して活躍すれば民間に開放されていない治療や開放呪を無制限で受けられる可能性がある。どうせお前はさっきの俺と祐也の会話を聞いていたんだろ？
　だからお前が祐也並に・・・いや八年前の祐也並に活躍すれば治せるだろう。
　だが今のお前に活躍するのは無理だ。鬼呪装備に触れることすら出来ない。」
「なんでですか？なぜその時に８歳の祐也が活躍出来て俺にはできないんですか？」

「そうだな？簡単に言うと祐也にはシノアと三葉、妹の楓そして柊暮人の従者の葵がいた。」
「その話は俺からいいかな？」
「わかった。」
「要するに当時から俺には守るものも守ってくれるものもあった。例えばさっきグレンが言った俺の身内！そしてお前にはいない・・・いや一人いるな。でも共に戦う自分の背中を預けられるそして背中を守れる仲間がいる、それと俺には才能があったからな。お前みたいに人を信じない奴と才能があり仲間を信じることの出来るやつ。どっちが活躍出来るかな？」
「そうか。なら、百夜優一郎はどうなんだ？」
「お前よりは可能性はあると思うよ。最下位とはいえ1度鬼を退けてるからな。以上だ！さっさと帰れ！それと扉の前で聞いた話は絶対に誰にも言うなよ。特に」
「わかってる。優一郎と与一だろ？」
「そうだ。言ったら切り殺すからな。」
　こういったのを聞いて君月は扉から出て行った。
「グレン？明日試験やるんだろ？」
「そうだが。」

「この試験を小百合さんにやってもらいたいんだけどいいか？」
「お前なりの試験って奴か？」
「そうだ。」
「わかったよ。めんどくせ渡しといてやるよ。やらせればいいんだろ？」
「頼んだよ。」
　そう言って俺はシノアのところに向かうのだった。
　・・・シノアを見つけた俺は
「シーちゃん（＊゛ω、＊）」
「ゆうちゃん（＊゛ω、＊）グレン中佐との会話は終わったの？」
「終わったよ。・・・と・・・は調子どう？」
「助けてくれたゆうちゃんに会いたがってます。私という妻がいながら浮気なんて。ひどい。」
「仕方なかったんだよ。だって・・・と・・・以外腐ってダメだったんだもん。（。―、ω゛―）」
「嘘ですよ。ゆうちゃん（＊゛ω、＊）私はこれからもゆうちゃんから絶対に離れませんからね。」
「あっΣ（。□。）そうだ。・・・って与一の・・・何だって。・・・がバカの・・・っ

てだけでも驚きなのにね。」
「そうなのｄ（⊠ﾛ⊠?･）真昼姉さんは出来るかな?･」
「死体が見つかったら体だけは生き返るから後はそこに1年かけて人格を作れば真昼姉に限りなく近い人は出来るよ。でも真昼姉では無いよね。」
「それでも、ゆうちゃんの鬼呪術はすごいよね。でも万能じゃないのね。」
「そうだよ、だからシーちゃんは死なないでね。」
「ゆうちゃんの頼みとあっては死ねませんね。私に死なないでと言うからにはゆうちゃんも死んではいけませんよ。」
「当たり前だろ。」
そう言って2人は帰り街を歩いて帰るのであった。

番外編　俺とシノアの出会い

俺とシノアが４歳になったばかりの頃。

「お父様？」

「なんだい？祐也」

「今日はどこに行くんですか？」

「柊家だよ。」

「なんで？」

「祐也と同い年の女の子の友達になる為だよ。」

「友達って仲良くなること？」

「そうだよ。それともうすぐ三宮祐也じゃ無くて柊祐也になるんだよ。」

「なんで？」

「祐也が天才だからだよ。」

そう。祐也は４歳にして様々な鬼呪を使いこなし剣術も大人でも勝てないレベルまで高められた為に周りからは『三宮の天才』そう呼ばれたのだった。

そう呼ばれる人材を三宮に置いておくほど柊家はバカではない。

同じ年の娘が柊家にいるために2人を許婚にすることを決めたのだ。
・・・しばらく歩いて父と柊家に着いた。
すると玄関から柊天利が出てきた。
「ようこそ！君が祐也君だね。私は柊天利という者だ。よろしく。さあ。中へお入り。それと君は帰りたまえ。」
「わかりました。祐也。天利様に迷惑をかけないようにね。」
「はい。お父様。」
そう言って父様は帰っていったのだ
「よく来たね祐也君。今日は私の娘のシノアに会ってもらおう。」
「はい！おじさん！」
「おじさんじゃなくて天利さんと呼んで欲しいな。」
「天利さん？」
「それでいいよ。」
とそんな会話を天利さんとしていると
「シノア！早くおいで。」
「お姉ちゃん！待って。」
と廊下の奥から聞こえてきて。

最初にお姉さん?がやってきて。
「君が祐也君?」
「うん。お姉ちゃんは?」
「私?私はね真昼って言うの。」と名前を教えてもらった時に真昼お姉ちゃんの後ろに1人の女の子がやってきた。
「シノア。挨拶なさい。」
「こんにちはm（　　）mシノア4歳です。」
「祐也です。4歳です。今日はお友達?になる為に来ました。」
「ホント?お友達になってくれるの?」
とシノアちゃんが言ってきたので
「うん!」僕はそう答えた。
それを見ていた天利さんは
「シノア。今日は祐也君とシノアと真昼のお部屋で遊んでおいで。食事の時間になったら真昼か暮人に呼びに行かせるから。」
「くれと?誰?」
「真昼とシノアのお兄ちゃんだよ。祐也君。」
「お兄ちゃん?優しいの?怖いの?」

「家族には優しいから大丈夫だと思うよ。」
「わかった。」
　そう言って僕はシノアと一緒にシノアの部屋に行きました。
「ここがシノアとお姉ちゃんのお部屋。」
「いろいろ物があるね。」
「女の子だもん。」
「僕も妹２人と同じ部屋で生活してるけどこんなに物は無いよ?」
「そうなの?」
「うん。・・・シノアちゃん!何して遊ぶ?」
「それじゃあおままごとしよう。」
「２人で?」
「お兄ちゃん達ととお姉ちゃん呼ぶ?」
「そうしよう!」
　こうなりシノアは兄妹を呼びに行った。
「入るぞ。君が祐也君か?」
「うん!お兄ちゃんは?」
「俺か?俺は暮人だ。」

「怖い人？優しい人？」
「いきなりなんて言う質問だよ。」
「怒った？」
「そう見えるか？」
「見えない。」
「なら、怒ってない。」
　と話しているともう1人、部屋に入ってくる。
「入るぞ。」
「征志郎！今会話中だ。静かに入ってこいよ。」
「すいません。」
「暮人お兄さん怒ってる？」
「祐也には怒ってない。」
「良かった。そっちの・・・お兄さん？は誰？」
「征志郎だ。よろしくな。祐也。シノアが部屋に来てと言っていたが何をするんだ？」
「おママゴト。」
「俺の役は？」
「お前は犬だろ？」

「征志郎兄さんは犬なの？」
「違うわ！暮人兄さんも変な事を祐也の前で言わないで。」
「事実だろう？」
ガチャ　__・ｃ（。ω。、__
「お姉ちゃんを連れてきました。これで揃った。」
シノアが役を決めた結果。
シノア→ママ
僕→パパ
暮人兄さん→子供兄
真昼お姉ちゃん→子供妹
征志郎兄さん→販売のお兄さん。
「なんか俺だけ役が可笑しいよな？」
「征志郎兄さんはこれでいいって暮人兄さんと真昼お姉ちゃんが言ってた。ねぇ。シノアちゃん！」
「うん！祐也君。」
「この短時間でこの２人は随分と仲良くなったな。」
「暮人兄さんが言うとなんか怖い。」

「真昼！聞こえてるぞ。」
「知らなーい。私はなんにも知らなーい。」
　こうして時間は過ぎていき夜の８時になった。
「天利さん！」
「どうした？祐也君？」
「お家に帰りたい。」
「泊まっていってもいいんだぞ？」
「お泊まりは今度、三葉と楓を連れてきた時でいい？」
「妹２人か？」
「うん。」
「わかった。妹想いのいいお兄ちゃんなんだな。祐也君。帰りの車を出すから靴を履いておいで。」
「うん！」
　こうして僕はシノアちゃんにあったのだった。
　自分が後々この家で生活するようになるのはこの２年後になる。

祐也の出した試験！

翌日グレンの試験を1日ずらして俺の試験を行った。
グレンの従者の小百合さんに手伝ってもらいながら。
「小百合さん。手伝ってくれてありがとうございます。」
「大丈夫ですよ。祐也君。この試験の結果はグレン様にも報告する事になってますからそのついでですよ。」
「それでもです。それと誰を引き抜くのはいけないかわかりますか？」
「はい。昨日喧嘩をした2人と与一君です。」
「与一は欲しかったんだけどな。」
「ごめんなさいね。与一君は才能があるからね。祐也君程では無いけど。」
「与一には俺の部隊に入ってもらって鬼呪術でのサポートに入れるように鍛えようと思ったんだけどな。残念。」
「でも、鬼呪術はわたしも使えますがそんなに才能が必要なんですか？才能があれば出来るものでは無い気がしますが？」
「それは小百合さんが才能に溢れているからそう感じるんです。姉を見てくださいよ。

才能が殆どないから初級の鬼呪術しか使えないじゃないですか?でも、それを必要としないレベルの剣の才能があるんですけど。」

話しながらも準備を続けていき準備が終わった。

俺は教壇に行き

「これからテストを始める!テストは2日間に分けて行うからしっかりとするように。まずは隣の席の人とペアを組んで下さい。」

この言葉を始めとして全員がペアを組み始めた。

「ペアを組んだな!」

「「はい!」」

「今からその2人に1枚の鬼呪札を渡す。これにはある力が込められている。この力を2人の体の中でうまく回すことができたら今から渡す拘束具が外れるようになる。例えば・・・シーちゃん!来て。」

「はい!お手本を見せればいいんですよね。(*(▽(*)」

「その通りだ。みんなはその時の二人の体に纏ってるものを見て欲しい。特に君月とバカにわな!」

といい俺はシーちゃんと鬼呪札の力を回し始めた。二分程すると俺とシノアの体の周りに緑色のオーラの様なものが出てき始めた。

「なんだ?あれは!」
それから、更に3分後にその緑色オーラが安定してきてるように見え始める。
「これは2人が息を合わさて力を回すことで出てくるものだ。上手いペアは緑色!下手なペアは黒色だ。その色で点をつける。今から一時間後に俺と小百合さんが見に来るからやっておけよ。シノアはペアがいないが俺としっかりと出来たから合格。とりあえず一時間後には来るからやっておくように。コツは黒板に書いておく。以上だ!」
黒板に書いた言葉
それは
相手を感じ相手に見せろ。
自分のハラワタをブチ撒けろ
それを見てバカは
「意味がわかんねえよ!シノア!説明しろ!」
「いいですけど、そんなことをしたらあなたはここを強制退出させられますよ。」
「なんでだよ!」
「そういう試験ですからね。答えを聞いたらカンニングと同じです。だからさっき私とゆうちゃんでやり方を見せたんですよ。ゆうちゃんが戻ってくるまでに気づけば合格。他人に聞けばグレン中佐の試験を今回は受けられない。カンニングせずに挑戦して尚

わからなかった場合はグレン中佐の試験を受けられますが受からないと思いますよ。そういう試験です。」
「ちっ!わかったよ!やるぞ!君月!」
「俺はわかったぞ。シノア!これはペアにも教えたらいけないのか?」
「はい。でもわかったなら私が書かますよ。バカさんには聞こえないようにお願いします。」
　そう言うと君月はシノアの耳元に行き答えを言う。
「正解です。後はペアに気づかせれば合格ですね。(▪∀▪)ニヤニヤ」
　1時間後・・・「よし!バカ以外は合格。それとバカも答えは聞いていないようだし明日のグレンのテストは受けていいぞ!」
「おい!祐也!これは何のテストなんだよ?」
「バカ!俺は今!お前達の教師だぞ!せめて先生位つけたらどうだ!それと君月!テストの今はわかってるんだろ?」
「おい!」
「はい。このバカには出来なさそうですね。相手の心の中を覗く為に自分の心の中を覗かせる。ですか?」
「半分正解だ。でも半分間違えだ。いや、間違えではない。足りない。与一はわかった

か？」
「多分。」
「言ってみろ。」
「相手の鬼呪術の特性を見る？ですか？」
「正解だ。鬼呪術にはいくつかの特性がある。回復、防御、攻撃、身体強化、蘇生だ。だが、蘇生に関しては無いに等しいから気にするな。でもお前達には残りの４つの内どれか１つが得意なはずだ。才能のある人は２つその中で特に才能がある与一と小百合さんは３つ。俺とシノアは４つある。今回のテストは相手の特性を見切れるかもテストしていたんだ。」
「先生！」
「どうした？加藤？」
「色は全部同じなんですか？」
「同じだ！でも相手の特性はわかっただろ？ペアの斉藤は回復の得意な女性だ。そして加藤！お前は攻撃の得意な男子だ。斉藤も加藤が攻撃系が得意なのはわかったか？」
「はい。」
「よくやった。今日の結果は俺の部下に結果を持って行かせる。では！解散！」
　この日の夜の斉藤の元に俺の部下から手紙が行き、翌日から教室には行かずに俺の部

隊の新人の班に配属されることになりました。そしてグレンのテストの途中で君月の妹に異変が起こりテストは一時中断された事を夜にシノアから聞いたのだった。

なんでだよ！

グレンのテストを終えてから1週間後、俺はある会議に出ていた。
ちなみにこの1週間で任務を2つ1人でこなした結果立場が大佐になりました。
俺！グレンの上司！……
そんなことより俺の隣でグレンが爆睡してるんだけど。天利さんが怒っちゃうよ。
「グレン・・・おい！一瀬グレン」
ああ。ついに来たよ。
「んぁ・・・ああ・・・クソ長げぇ会議は終わったか？」
何言ってんのこの人は？
「・・・」
暮人兄さんも黙っちゃったよ。
「その態度はなんだ？一瀬家の分際で・・・」
「これは柊天利様失礼しました。
なんせひどく退屈だったもので。」
「貴様・・・いい気になるのもいい加減に」

「まあまあ・・・グレンの態度が悪いのはいつものことでしょう。話を続けましょう。」
ナイス！フォロー深夜兄さん！グッジョブ（？）？
と思ったが
「俺！行っていいか？情報は後でまとめてくれよ。」
何言っちゃってんのこの人？
「話を続けましょう。
関西方面の吸血鬼たちが不穏な動きをしているようですが・・・」
ナイス！深夜兄さん！そのスルースキル最高（^^）v
「俺行っていいか？情報は後でまとめてくれよ。」
「ちょっとグレン。あんまり態度悪いと流石に僕もフォローしきれないんだけど。」
「はっ？誰がフォロー頼んだっけ？」
「・・・・・もぉ（笑）」
「アホがいる。」
「祐也。誰がアホだよ。」
「それはグレンでしょ。」
「うるせえよ。深夜。それにこの日本帝鬼軍はお偉い柊家様が牛耳ってるんだだ！なら分家の一瀬家はお呼びじゃないだろ？」

「ならさっさと消えろよクズ！」
「・・・だから消えるっつってんだろ？祐也を連れていくぜ！」
　そう言ってグレンは俺の裾を掴み引っ張っていく。
「ちょっと！グレン！」
「いいから行くぞ。」
「わかったから待って。天利さん！」
「どうした？祐也大佐？」
「自分の纏めた資料を部下に持たせるのでここは部下に任せてもよろしいですか？」
「わかった。今回だけだぞ。」
「ありがとうございます。幸（こう）」
　俺が呼ぶと忍の様な姿をした部下が出てきた。
「はい。祐也様。」
「俺の資料を机の上に置いて置いたから必要な時にしっかりとみんなに伝えて。それと終わったらすぐに俺の執務室に来て結果を伝えてね。」
「かしこまりました。祐也様。」
「それじゃあ頼んだよ。天利さん。すいません。」
　そう言ってグレンに引っ張られながら会議室を出ていくのだった。

「あーくそつまんなかった。
　世界滅びた後も内政やら政治やら派閥争いやらあほかって！」
「仕方が無いことだよ。だっ」
　トッ！
　後ろから足音がした。
「バカグレン見つけたあああああああ！ついでに祐也も！」
「俺はついでかよ。」
　バカが走ってやって来てそのままの勢いでグレンに飛び蹴りをしてきた。
「・・・・・・・・・・・・・・あ？」
　と反応をして片手で足を掴んだのだ。
「俺に鬼呪装備渡さないで１０日間失踪するってどういうことだあああああああああ！それと祐也！なんで茜が月鬼ノ組の格好をしてこの部屋に向かっていた？捕まえた時に［祐也様に呼ばれておりますので申し訳ございません。それと私の名は茜ではなく三宮　幸（さんぐう　こう）です。それでは失礼します。］って言われたぞ！」
「幸もついにバカに見つかったか？まぁいいかな。どうせ近いうちに会うことになってたし。」
「それにしても珍しく祐也がヘマをしたな。それとバカ。相変わらずお前はわかりやす

いな。」
「？」
「確かにわかりやすいな。」
「くだらん政治の後だとちょっと面白いぞ。」
「その会議に「俺は面白くねえよ!! いい加減！俺に吸血鬼殺せる武器よこせ!!」・・・・・・・・・」
「おまえ！そ～んなに吸血鬼に復讐したいのか？」
「したいねっ！俺はその為だけに生きてんだよ！」
　その為だけにか。
「よし！なら明日！鬼と契約するか！で！前線出してやる！」
　やっぱりか
「グレン！こいつに鬼呪装備は早いよ。鬼呪術もロクに扱えないバカには前線はまだ早いよ。」
「ならそれは祐也が今週中に問題無いレベルまで教えろ。」
「わかったよ。でもそれは幸に任せるかな。」
「えっ？マジで！」
「ああそうしよう。鬼に呑み込まれたらお前の責任な？」

「無責任な。」
「おおお問題無いね！
　それだよ！そういう展開をずっと待ってたんだよ!!」
「ははは。やっぱ馬鹿だなお前。」
　珍しくグレンとハモるくらいこいつは馬鹿だよ。

番外編　私が幸（こう）になった日

ｓｉｄｅ幸

私は３年ほど前に主である祐也様に救われた。

……

私はある山に吸血鬼に捨てられたようだと祐也様に教えてもらった。

３年前に祐也様はある任務で吸血鬼の討伐に以前富士山と呼ばれていた山まで来ていたそうだ。そこで。

ｓｉｄｅ祐也

ここは山梨県の富士山の麓だ。以前は綺麗だったであろう景色が未だに残っている。

「シノア。山が近づくに連れて吸血鬼が多くなるのはなんでかな？」

「そこに吸血鬼の都市への入口があるんじゃないですか？」

「祐兄！」

「どうした？三葉？」

「私の予想だけどというか天字竜の話なんだけど、ここって昔は吸血鬼の敵の住処だったんだって。」

「私の予想の反対の答えですね。」
「でもね。もう１００年以上前に滅びたって言ってる。」
「ならなんでって吸血鬼が近くにいるから倒してから話そうか。」
　俺がそう言うと吸血鬼が目の前に三匹出てきた。貴族では無いようなので
「シノア！三葉！作戦はＡで行くよ。いつも通り頼むよ。」
「了解（です。）」
　こうして俺達は吸血鬼３匹を倒すのだ。
「なんか鬼呪の反応がある。」
「どこですか？」
「どこから？」
　と聞かれたので森に指をさす。
「あの中から。多分死んでる。俺の鬼呪術で蘇生してこの部隊に入れようと思うんだけど。でも成功するかな？」
「成功するかどうかはおいといてとりあえずやってみましょう。」
「そうだよ。祐兄！とりあえずやってみてダメだったら仕方が無いよ。」
「だな。なら行くか。鬼呪術の最中は防御頼むよ２人とも。」
「「任せなさい。（？）／＋＊／任せて祐兄！」

こうして俺は2人を連れて森の中に入っていった。そこには名前の書かれた服を着ている死体が8体程捨てられていた。
「あの腐っていないやつから鬼呪が溢れてる。」
「ここまでくれば私でもわかります。」
「確かに。私でもわかるぞ。」
「名前は茜か。とりあえずやってみるかな。」
そう言って俺は懐から小太刀を1本と術式の絵が描いてある紙を取り出す。
「2人とも。守りを頼むよ。」
そう言って茜と書かれた服を着ている死体の服を脱がせて体の上に紙を置いた。そして小太刀で右手の指すべての腹の部分を軽く切り血を出す。そして術式を発動させながらそこに自分の血を滲ませる。少し滲んだら身体の中に少しずつ指が入っていく。そして動いていない心臓に触れる。心臓に触れたら紙に書かれている術式を心臓に書き込む。少しずつゆっくりと2時間ほどかけてしっかりと刻み込んだ。すると心臓が少しだが動き出す。だが、蘇生には代償が必要だ。ここは可哀相だが人格と記憶を代償に捧げよう。また1からしっかりと人格を形成させようと決めて残りの仕事に取り掛かる。一つ目はこの鬼呪を利用できるように壊れた回路を治すこと。二つ目にこの娘の中にいる鬼を1度違う鬼呪装備に封印すること。そして最後に服と名前をあげるこ

と。服は持ち歩いてるカバンの中に隠密行動用のいわゆる忍の様な服があるのでそれに着替えさせた。そして名を幸せになって欲しいということから（幸）と書いて（こう）にしようと決めた。そして一時的なものではあるが擬似人格を取り付けた。これにより1年はこの擬似人格で生活が出来るだろう。後はこの1年で人格を確立出来るようにすればいいのだ。

ｓｉｄｅ幸

私は誰かの背中で目を覚ました。黄色い髪をした綺麗な顔立ちの人だ。隣には薄紫色の髪をした小さな女の子。その反対側には私を背負っている人と同じ色の髪の毛の女の子。ここは何処だろう。そう思いながら私は再び眠り出した。

……

目を覚ますと私は何かに乗って隣の人の膝を枕に寝ていた。

私が起きたのに気付いた彼は

「目が覚めたかい幸（こう）？」

と言って声をかけてくれた？

「幸って誰？」

「君の事だよ。」と言って何があったのかを説明してくれた。

ハッキリ言うと何処までホントの事なのかはわからない。けど2つだけわかるのは

この人と私には同じ血が流れていること。それとこの人といると私は落ち着けるということ。

それからしばらく私は彼と揺れる乗り物・・・車という物に乗って彼らの住む場所に連れて行ってもらった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれから1週間！私は彼の旧姓の三宮を彼とその家族から貰うことが出来た。彼らの家族の一員になれたのだ。私を助けてくれた祐也君にその姉の葵さん。双子の妹の三葉ちゃんに祐也君の1歳年下の妹の楓ちゃん。彼らは私を迎えたくられたのだ。祐也君は今は柊家という偉い人たちの家族でもあることから柊家の人達にも私の事を紹介してくれた。

天利さんや暮人さん達も私を迎えてくれたのだ。私はそれが凄く嬉しかった。

・・・そして半年の時間が経った。祐也君・・・いや・・・祐也様に頼んで私を従者にしてもらった。私は祐也様に毎日の様に訓練を付けてもらった。訓練の無い日も自主的に出来るものを繰り返しやった。そして私は鬼呪術と元々私の中にいたという鬼を黒鬼装備にしてもらった小太刀を使った戦いを覚えた。普段は正装をしている私だが訓練の時は祐也様にいただいた忍の様な見た目の服を使って訓練を受けた。訓練以外の時は楓ちゃんと一緒に祐也様の書類を片付ける仕事をした。

・・・・・・・・・それから時間が経ち私も少佐にまで登り詰めた。私はいつも通り祐也様に頼まれた任務である新人育成に取り掛かっていた。そんな時祐也様の呼び出しをいただいたので向かっている途中ある男に声をかけられた。

「待てよ。」

「なんですか?」

「お前!茜か?」

「祐也様に呼ばれておりますので申し訳ございません。それと私の名は茜ではなく三宮幸（さんぐう　こう）です。それでは失礼します。」

そう答えて私は会議室に走った。それにしても茜とは誰のことなのでしょう?

新キャラ紹介。

新キャラ！

三宮　幸　　（さんぐう　こう）

身長１５８ｃｍ

体重私にあまり恥を欠かせないで下さい。（（≪●≫））丑（（≪●≫））

日本帝鬼軍

少佐

祐也の従者

鬼呪術による蘇生された人間第一号

蘇生する時に祐也の血を使った為身長が少し高めになる予定。

年齢は祐也の３歳下になる。

回復と攻撃の鬼呪術を得意としており攻撃の鬼呪術の使い方の応用で少しの間透明化できる。戦闘のスタイルはｔｈｅ忍者!!

元々は百夜優一郎と同じ孤児院で育った茜という名前の女の子だったが脱出の際にフェリド・バードリーに切られて血をすべて吸われる。優一郎が逃げ切った後にクル

ル・ツェペシの命令で富士の樹海に他の子供と一緒に捨てられる。だが、鬼呪の才能があった為に彼女の身体だけ腐らずに残った。捨てられて1年後に祐也達に死体を見つけられ祐也の蘇生の鬼呪術によって蘇生し、幸（こう）という名前を貰った。

見た目は茜を成長させて背を高くし、祐也の真似をして髪を留めているが祐也よりもだいぶ高い位置で留めているために普通のポニーテールになっている。普通に伸ばすと腰の位置まで髪の毛がある。

武器

黒鬼装備

白雪丸

鬼呪装備としての見た目はＮＡＲＵＴＯのサスケが使っていた刀を脇差しの長さまで短くしたもので柄の部分は純白になっている。

鬼としての姿はＢＬＥＡＣＨのルキアの斬魄刀の袖の白雪と同じ姿。

元々幸（こう）として蘇生した時に出来た鬼なので彼女を乗っ取る気は全くない。鬼の本名は（しらゆきまる）ではなく（はくせつまる）という。

能力は発動型と憑依型の両方を併用して使わなくてはならない。

全開で発動すると来ているもの上に純白の着物が出てきて周りに雪が出てくる。この雪に触れても切られることは殆どないがしばらく使い続けると氷の刃になり切れ味

抜群になる。これを使って戦い尚且つ身体能力も五～十倍にも伸びる。
「凍えろ！白雪丸！」というと鬼呪装備がＢＬＥＡＣＨの卍解の様な状態になる。この時に鬼の能力を使うと小太刀が長くなりサイズが日本刀と同等の大きさになる。能力自体もパワーアップし、雪による攻撃範囲が倍になり身体能力も４０倍まで強化される。
　幸は
「私の命は祐也様の物です。祐也様の命令しか聞きません。祐也様の命令を聴き！実行することが私の喜び！」
　と幸は述べているがそれに対して祐也は
「幸にはあまり無理をして欲しくない。蘇生させたのは確かに使える人材だからだけども積極的に死地へは向かわせるつもりは無いので俺の為に命をかけてくれるのは嬉しいけど常に命令の最初に死ぬことを許さないと言わないと死にそうなので怖い。」と祐也は常に思っている。

授業とまさか

「それでは一昨日のテストを返します。今回は小百合先生に変わって三宮幸が授業を受け持ちます。後半から叶（かなえ）さんが授業をしますので頑張ってください。」

　と言って幸は俺を見てきた。手伝って欲しい時の目だこれは。

「それではまず！・・・・・・・・・」

　こうして俺は全員にテストを配った。

　馬鹿よ。・・

ドンマイ。

「祐也先生！」

「はい。それと今日は俺は補佐だから幸に聞いてください。」

「はい。幸先生。」

「はい。どうしましたか？」

「このテストはなんの意味があるんですか？」

「鬼呪術に対する理解度を調べるためです。」

「そもそも鬼呪術ってなんですか？」

「それは開発者の祐也様に聞いてください。」
「わかった。
鬼呪術とは基本は鬼呪装備を持っていないと使えない。
あくまでも基本だぞ。才能のある幸や与一、俺は別だが。
中で鬼を飼っている訳では無い。あくまで才能だ。鬼呪術は主に五つの特性に別れるこれは以前説明しただろ。あれはその人の本質によって変わる。
簡単に言うと回復の特性があるやつは暖かな抱擁力のあるヤツだ。
この五つの特性で蘇生はほぼいない。回復も数がかなり少ない。これは、重要だぞ。幸はメインが回復で鍛錬の成果で攻撃の鬼呪術が使えるようになった。そんな感じで特性と鍛錬しだいでは無限の夢を見せてくれる力だ。だけど注意することがひとつある。鬼呪装備を持って初めて使えるようになった奴は使い過ぎると鬼になるから気をつけろよ。以上だ！」
と言ってから幸の授業を開始した。少しして
「失礼します。祐也様。」
「夢か。遅かったな。」
「すいません。任務で遅れました。」
そう言って夢が教室に入ってきた。

「お姉ちゃん！」と与一が反応する。
「えーと・・・早乙女与一君ですね？」
「そうだよ。お姉ちゃん。」
「初対面だと思うのですが？」
「夢。」
「なんでしょうか？祐也様？」
「何でもグレン曰くお前の弟らしいぞ。」
「そうなのですか？でもあまり関係ありません。私は祐也様の物です。今さら姉弟と言われましても私には祐也様の家族に入れて頂いたため三宮と言う苗字があり祐也様に助けていただいた恩があり、一緒にいたいという欲があります。」
「そうか。ありがとな夢。でも与一の話は放課後に少しだけ聞いてやってくれ。」
「わかりました。」
「与一もそれでいいな。」
「はい。」
「よし。それとシーちゃん。やってよし！」
「了解です！」
そう言ってシノアはバカのテストの解答用紙を取った。

見事な０点だ。
シーちゃんは本領を発揮してその取った解答用紙を他の男子のグループの机の上に置く。
「マジだ！」
「解答なんですべて平仮名だぜ！」
「月鬼ノ組ってエリートしか入れないんじゃないのかよ？」
こうしてバカのバカさかげんがこの教室の全員に伝わったのである。
そして時は放課後になり俺の執務室に与一、夢、俺、シノア、幸となぜかバカと君月がいた。
「祐也君。なんでお姉ちゃんが生きてるの？」
「まず第一の質問が俺に来るのかよ。」
「なら俺も！なんで茜が生きているんだよ。」
「おまえもかよ。それと茜じゃなくて幸だ。間違えるな。茜はここにはいないし与一！お前の姉もいない。二人の目の前にいるのは同じ体を持つ別人だ。お前達の記憶は愚か、見た事もねえよ。」
「ならよ！祐也はこの身体をどこで手に入れた。」
「夢は街の調査中の家の中、幸は富士の樹海の中でシノアと俺の妹と見つけたよ。」

「なんでだよ。茜はあの時死んだはずだろ。」
「お姉ちゃんだって吸血鬼に殺されたはずだよ。」
「幸の方は死んでいたよ。ただ夢の方は仮死状態だよ。」
「幸に使ったのは俺しか使えない蘇生の鬼呪術と俺の血で夢に使ったのは回復の鬼呪術と俺の血と吸血鬼の血を一滴だ。蘇生の鬼呪術の代償として幸の記憶と人格を夢は吸血鬼の血の副作用を無くすために同じく記憶と人格を無くした。そして一年近い時間をかけて人格を染み込ませた。それがこの2人だ。お前達の知っている2人では無いよ。」
「なんで2人を生き返らせたの祐也君?」
「そうだ!祐也!なんでだよ。」
「ならなんでグレンはバカを保護した?なんでグレンは与一を月鬼ノ組の候補の教室に入れた?同じ理由だよ。夢として幸には鬼呪術の才能があった。だから俺が復活させた。俺の実家の名字を与えた。名前を与えた。何かダメなことでもあるか?」
「文句はねえよ。でもよ!俺としてはこんな形で再開したくなかったよ。茜にはよ!」
「僕もお姉ちゃんには会えないと思ってたから嬉しかったんだけどそれでも会いたくなかったかな。」
「そりゃそうだな。夢には俺と同じように二つ名で「姫騎士」って言うのがあり幸には

「氷の姫」っていう二つ名があるからな。お前達とはレベルが違う。シーちゃんも本来なら二つ名がついてもおかしくないがな（　笑　）」
「ありますよ。私とみっちゃんの二人合わせて「死神姉妹」ですよ。」
「確かに似合ってるかもな夢。」
「はい。祐也様。シノア様も三葉様も鬼呪装備が鎌ですからお似合いです。」
「私もそう思います。なんか戦い方もそれっぽいからね。」
「今日は幸は機嫌がいいな。口調が砕けてるよ。夢もこの位軽い感じで話してくれてもいいのに。」
「そんなことを言わないでください。」
「あのー。」
「何かな？シーちゃん」
「私をおいて盛り上がらないでください。（。—⊠·⊠—。）」
「ごめんごめん。シーちゃんってば不機嫌にならないで。（・ω・）ノ（´д、＊）なでなで」
「今回は許します。（＊、ω、＊）」
「ありがとう。それとバカと与一と君月は用が無いなら帰ったら？」
「俺がまだ何も言ってない。」

「君月は何のようなんだよ。」
「俺の妹の未来を治せるか？」
「さあな。ダメでも幸達と同じようにして欲しいってか？」
「そうだ。」
「なら、ハッキリ言うぞ。ムリだ。あの病の間は死なない！嫌・・・死ねない。」
「なんでだよ。」
「あれは病ではないからな。簡単に言うとバカの身体に住んでいるのと同種の物だな。」
「なんだよ。それは！」
「いいからもう帰れ！」
そう言って俺は3人を追い出した。